様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　６ 月 １１ 日現在

機関番号：３２７０４
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2018～2023
課題番号：１８Ｋ００３９２

研究課題名（和文）イングランド復讐劇の常套的悪役の近代初期性：反価値の人格化表象の文化史的研究

研究課題名（英文）Early-modernity of the Stock Type of Villain in English Revenge Tragedy

研究代表者
中村　友紀（Nakamura, Yuki）

関東学院大学・経営学部・教授

研究者番号：８０５２９７０１

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,700,000円

研究成果の概要（和文）：「イングランド復讐劇の常套的悪役の近代初期性：反価値の人格化表象の文化史的研究」のテーマにおいて、近代初期イングランド復讐劇の人物造型およびその他の演劇的表象において、善悪や美醜などの諸価値がいかに表現されるかという問題に、文化史的アプローチで取り組んだ。特に、悪や醜などへのルネサンスにおける強い関心の根拠を人文主義に見出し、人文主義的な価値体系において負の価値づけをなされたものについての、演劇における表象を分析した。また、ルネサンスドラマの負の価値の表象が、古代の文芸や芸術に由来し、現代の表象において継続する点についても、ルネサンスの戯曲と古典劇と現代の映画の異同の分析を通じて研究した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
ルネサンス演劇が生み出した表象の様式や定型は、現代の表象文化においていまだ継続している。いまだ通用するイメージおよび表象は、ルネサンスという近代初期性が現代の諸価値において継続していることを意味しつつ、しかし他方、一見同じ表象に見えつつその意味は大きく変わっていることもある。当課題では、ドラマにおける負の価値の表象分析を通じて、近代初期の社会・文化における善悪や美醜などの諸価値への一つの理解の方法を示すことができた。さらには、人文主義者が模範とした古典演劇および現代の翻案映画との比較研究を通じて、近代初期が媒介する古代から近現代までの表象およびそこに表れた諸価値の異同や影響関係を明らかにした。

研究成果の概要（英文）：In this project titled “The early modernity of the antagonistic stock characters in English revenge dramas: A cultural-historical study of the personification and representation of anti-values” I studied the relationship between good and evil in the character development and other theatrical representations of early modern revenge dramas. This study focused on the issue of ethical and aesthetic values such as good/evil and beauty/ugliness through the approaches of cultural-historical studies. The strong interest in evil and ugliness of the people in the Renaissance period is rooted in humanism. Humanist value system is the clue for analyzing the representations of anti-value in dramas. I also explored how the representation of negative values in Renaissance drama originated from ancient literature and art and continues in modern representations, analyzing the commonalities and differences among Renaissance dramas, classical dramas, and modern films.

研究分野：英文学

キーワード：復讐劇　近代初期イングランド演劇　セネカ　ルネサンス人文主義　倫理的・美学的価値　反価値　悪役　翻案映画

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

研究開始当初より、課題の核心となる「問い」の大枠として、近代初期復讐劇特有の悪役像とはいかなる負の価値の表象であるのか、また、近代初期および現代の観客にとっての悪役イメージの訴求力とはなにかという問題設定を行っていた。演劇・ドラマの悪役を倫理的・美学的尺度における負の価値の表象として分析し、また、その様式性を検証することを目的としていた。最終的なゴールとして、演劇およびドラマの、価値や知識・情報の共有の媒体、あるいは個人と社会との接触の媒体としての役割にまで敷衍して復讐劇の人物造形を解明することを目指していた。より具体的には、以下の[1]～[3]の問いを設定していた。

[1] 16、17 世紀の復讐劇においては、思想や倫理の次元で、セネカ悲劇のいかなる要素がどのように、近代初期的パラダイムに吸収されたのか。

[2] 復讐劇の悪役の常套化・様式化には近代初期イングランドのいかなる文化史的・社会史的要因が作用しているか。悪役の人物造形は、いかなる反価値の表象であるのか。また、その表象が持つ近代性・近代初期性とはなにか。

[3] 近代初期に成立した悪役像の様式は、現代ドラマにおいてなお見られる。反価値の表象やその観客受容において、近代初期の何が現代に継承・共有され、いかなる点に変化がみられるのか。

２．研究の目的

研究の目的は、先述の問題設定[1]から[3]の中でも[2]を中心に、倫理的・美学的価値の表現の継承および変遷を可視化すると同時に、その中でも近代初期演劇の表象の近代性を明らかにすることであった。特に、近代化の大きな転換点であるルネサンス期の演劇の、近代初期の社会・文化の諸価値の表象のメディアとしての特徴を明らかにすることを目的とした。その解明の一つのアプローチとして、近代初期復讐劇の悪の人物造形がセネカ悲劇の翻訳・翻案から発展し、エリザベス朝からジェイムズ朝にかけて様式化された点について、各論文のそれぞれの議論の観点から扱った。セネカ悲劇の受容が近代初期固有の歴史的諸要素の作用の所産として復讐劇というジャンルに結実したメカニズムを解明した。特に、悪役を近代初期文化の所産たらしめる要因として、プロタゴニスト・アンタゴニストの個人主義に着目し、その点を戯曲のテクストおよび同時代の各種史料において分析した。他方、現代ドラマの悪の人物類型の多くが明確にとどめる近代初期的要素も研究対象とした。近代初期的表象の諸特徴のうち何が現代に残存し、それは近代初期と同じ意味を持つのかあるいは異なるのか、また、何が変化したのかといった問題を追究することで、悪役造型を通じて近代初期復讐劇が、個人の概念や自己認識等の近代化に対して果たした役割を解明することを目指し、当課題期間中に執筆した論文で扱った。

３．研究の方法

当課題期間中に執筆した論文では、以下の方法で分析を行った。

先述の[1]については、セネカ受容のイギリスにおける導入窓口の中心となった法学院（Inns of Court）での教育や演劇活動に注目した。セネカ受容のあり方を示す文化史的状況を、先行研究を通じて理解した。また、17-19 世紀の法学院の出納簿や出来事の記録を集約した史料や、法学院出身の人文主義者（フランシス・ベーコンなど）の著述を参考資料とした。先述の [2]については、主にイングランド復讐劇のテクストを分析した。比較対象として、13-15 世紀のイタリア人文主義者によって書かれた復讐劇(Albertino Mussato や Gregorio Correr など)のテクストを比較対象とすることで、人文主義の知的体系・潮流としての全体像の中で、イングランド復讐劇を分析する方法論を見出すことができた。特に、人文主義という枠組みがあることで、近代初期人の権力への警戒心についての当時の言説やイメージなど史料のうちに探すという指針を得られた。また、言語テクストのみならず、絵画などのイメージもテクストとして活用した。表象体系の典型例を当時の一般的な認識を表す各種表象に見出し参照しつつ、イングランド復讐劇の文学テクストを分析した。先述の[3]については、近代初期的様式を現代の映画に見出し、現代の文化的コンテクストにおける表象の意義を、近代初期的表象に照らして検証するという、文学テクストと映像テクストを間テクスト的に扱うという方法をとった。特に正義のテーマや復讐のプロットを備えた、いわゆる vigilante films のジャンルを取り上げた。また、復讐的ではないが、復讐劇ではない作品も分析対象に加え、反価値のイメージを多く持つ William Shakespeare の *Macbeth* と、その翻案映画である黒澤明の『蜘蛛巣城』、およびその英語字幕を比較し、文化固有の特徴を強く帯びた反価値の表象が、文化的レファレンスとして様々な解釈により異なる表象でもって表された例として研究した。

４．研究成果

当初は 2018 年度－2021 年度の課題期間であったが、パンデミックを理由とした延長を申請し、課題期間を 2023 年度まで延長した。以下が、6 年にわたる課題期間の成果である。

2018 年度には、主に以下の（１）～（４）の研究を行った。以下の 4 つの論文においては、腐敗する権力への人文主義的警戒や、権力者とプロタゴニストの対立という復讐劇のテーマについて、権力と対立しうる自律性を倫理的であるとする言説が目立つ人文主義者の著述と関連付けて、議論した。（１）プロタゴニストと tyrant（暴君）とアゴーン的対立は古典演劇由来であり、現代の様々なドラマ的メディアに受け継がれている点を、論文「小人とは誰か：『借りぐらしのアリエッティ』の少女の通過儀礼」（『宮崎駿が描いた少女たち』新典社 2018 年所収）にて分析した。（２）美学的・倫理的価値尺度では受け入れがたい反価値の表象が、ルネサンス的な人間性の定義に反するもので構成されていることに注目し、人文主義特有の様々な概念と照らし合わせて分析した論文“Revenge Drama as a Convention of Representing Anti-Values”を ESSE（The European Society for the Study of English）2018 年大会（チェコ共和国、マサリク大学にて 2018 年 8 月開催）で口頭発表した。（３）近代初期復讐劇の、腐敗権力の暴君というアンタゴニストの典型的イメージに注目し、近代初期社会における王権、および王権を抑制するのが法曹の役割であると自任する教養人の心性を検証した論文“Vigilance over Monarchy in Early Modern English Revenge Tragedy”を、国際学会 Monarchy and Modernity（イギリス、ケンブリッジ大学にて 2019 年 1 月開催）で口頭発表した。（４）近代初期復讐劇の正義概念へのセネカ劇の反権力の思考の影響を検証した論文“The Modern Image of Justice: Senecan Tragedies as a Medium of Renaissance Humanism”は、2017 年の口頭発表を書き直した論文であり、2019 年度に国内ジャーナルの掲載が決定している。

2019 年には、以下の（１）－（５）の研究を行った。復讐劇も含めた近代初期悲劇の主題が、人間性であり、人文主義的価値尺度における人間性に悖ることが、概ね必ず破滅という悲劇的結果にいたる定石に、近代初期ドラマの特徴を見出した。そこから、ルネサンス人文主義的な人間性の観念に注目し始めた。このテーマは、ルネサンスの近代性を示すものであるが、現代の表象文化においてなお同テーマが見られることから、現代の人間性についての観念に潜在するルネサンス人文主義的特徴を、翻案映画において検証した。(1)復讐者の死という典型的結末の因果応報の質の 1600 年以降の変遷を文化史的に分析した。論文“A Revenger Must Die: the Scapegoat for the Community in Revenge Tragedies”として 2019 年度 Shakespeare Theatre Conference（於：カナダ、ウォータールー大学）で口頭発表した。(2)ユートピア文学の新世界の設定もモンスターも、人間性の定義を解体する枠組みとしてシェイクスピアの『テンペスト』で表現され、その翻案であるリドリー・スコットの 2017 年の映画『エイリアン：コヴェナント』において先鋭化されている。本論文は“Utopia and the Monster: Ridley Scott’s Alien: Covenant as an Adaptation of The Tempest.”と題して、European Shakespeare Research Association 2019 年大会（於：ローマ第 3 大学)で口頭発表を行った。(3)近代初期復讐劇の正義の概念への人文主義的な反権力の思考の影響を検証し、論文“The Modern Image of Justice: Senecan Tragedies as a Medium of Renaissance Humanism”(『自然・人間・社会』67 号（2019 年 7 月)）として成果公開を行った。(4)上記(2)の論文を『自然・人間・社会』68 号（2020 年 1 月）において成果公開した。(5)研究協力者と研究代表者との 3 名で、シンポジウム「反価値の人物造形：西洋古典及び近現代ドラマの悪役の比較研究」を、日本比較文化学会が主催する関西支部例会（2019 年 10 月、於同志社大学）にて行った。

2020 年度には以下の（１）－（４）の研究を行った。前年度の主な研究テーマであった、人文主義的な人間性の条件という観点から、人間性の後退としてルネサンス的尺度においては否定的に捉えられる暴力の表象を、中心的に扱った。 (1)近代初期復讐劇の暴力表象の典型を分析し、学会にて論文発表した。暴力表象の倫理的・美学的な正価値と反価値のルネサンス的特徴を分析し、さらに典型的暴力表象が現代の表象文化にも継続しつつも倫理的・美学的な価値づけが近代初期と異なる点を分析した。論文“Renaissance Dramatic Convention of Representing Violence and Its Modern Continuation: Titus Andronicus and Death Wish”として 2020 年 9 月 London Centre of Interdisciplinary Research 主催の学会 Violence and Society（オンライン開催）で口頭発表した。 (2)近代初期復讐劇が、コミュニティ救済のスケープゴートの表象に近代的個人の概念が含まれる点を分析し、論文“Modernity of the Scapegoat Ritual in Early Modern English Revenge Tragedy”を 2020 年 12 月 London Centre of Interdisciplinary Research 主催の学会 Play, Masks and Make-believe: Ritual Representations（オンライン開催）で口頭発表した。(3)論文“Horror of Dehumanization: The Ethical and Aesthetic Boundary in Early Modern English Revenge Tragedy”を『経済系』282 号（2021 年 3 月）に掲載した（pp.160-169)。近代初期復讐劇におけるルネサンスの倫理的・美学的価値観が忌避するものの、ホラー表象としての特徴を、人間性の条件の対蹠的属性として分析した。(4)上記(1)の論文を“I Have a Dream”: From a Culture of Violence to a Culture of Nonviolence（Interdisciplinary Discourses: London, 2021）に第 1 章（pp.21-37）として掲載した。

2021 年度は、以下の(1)(2)において、前年度から引き続き重点的に取り組んできた、ルネサンスの諸価値にかかわる近代初期的な人間性の観念の表象を論じた。(1)"The Renaissance Paradigm of Humanity in The Tempest and its Modern Interpretation by Alien: Covenant" は、2021 年に順延された The European Society for the Study of English の国際学会（オンライン開催）にて 2021 年 9 月 3 日に口頭発表したのち、『自然・人間・社会』72 号（2022 年 1 月発行、pp.1-12）にて論文として公開した。ウィリアム・シェイクスピアの *The Tempest* の翻案である 2017 年の映画 *Alien: Covenant*（監督リドリー・スコット）における現代の人間性の表象のルネサンス的性質を分析した。AI や生物兵器に人間性の負の側面を見出すことは一見現代的に思われるが、ルネサンス的な人間性の理想および人間性への懐疑と共通するという結論に達した。(2) “The Furies and Justice in Ancient, Early Modern, and Modern Revenge Drama”を、London Centre for Interdisciplinary Research が 2021 年 9 月に開催した International Conference on Myths, Archetypes and Symbols: “Models and Alternatives”（オンライン開催）にて口頭発表した。ギリシャ悲劇の復讐劇、近代初期復讐劇、復讐を主題とした現代の映画、これらいずれにおいても復讐の概念が擬人化され、社会から排除すべき負の要素として認識されつつも、それぞれの社会の人々の暴力や復讐への強い関心の痕跡が認められる点に注目した。忌避や関心の結実としての擬人化表象において、連続性と同時に各社会の特徴も潜在する点を議論した。

2022 年度は、課題期間の延長により、以下の（１）－（２）の研究を行った。2022 年は、ルネサンスの表象文化における負の価値の表現について、前年度までとは異なる観点で検討した。死や宗教的規範からの逸脱、倫理的落ち度といったテーマが、翻案において、また、翻訳において、文化的レファレンスの問題から、大きく異なる表現で代替される点について分析した。（１）2022 年 6 月 28 日から 7 月 4 日にかけて、イタリアのローマ第 1 大学で開催された国際学会“Shakespeare, Austin and Audiovisual Translation”にて口頭発表を行った。黒澤明の『蜘蛛巣城』DVD に付された 2 種の異なる字幕が、いわゆる文化の「厚い記述」として日本語、英語それぞれの文化の諸価値を、全く異なるベクトルで訳出している点を分析した。（２）論文「ボレアリズム的『ハムレット』：映画『ノースマン』の北欧表象」（『比較文化研究』151 号 2023 年 5 月発行）を執筆した。しばしば、デンマークというよりはイングランド的であると評されるハムレットの人物造型が、現代の翻案映画『ノースマン』ではヴァイキングとして再現されている。そのヴァイキングの人物造型が、20 世紀のハリウッドの典型的な B 級映画ジャンルであるヴァイキング像であり、また現代社会においては白人至上主義等と関連付けされがちな表象でもある点に注目し、近代初期のプロタゴニスト像と現代の娯楽映画のプロタゴニスト像の特徴を検証した。

2023 年度には、以下の（１）の成果とりまとめを行った。（１）当課題のテーマである、倫理的･美学的価値基準における反価値の表象についての、当課題期間中および次の課題(22K00436)期間中の成果のうち既に学会誌等で公開済みの論文をとりまとめて再録する形で、一般向けの書籍、『私たちはシェイクスピアの同時代人』（春風社　2024 年 3 月）として出版した。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計7件（うち査読付論文　7件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　3件）

１．著者名 中村友紀	４．巻 151
２．論文標題 ボレアリズム的『ハムレット』：映画『ノースマン』の北欧表象	５．発行年 2023年
３．雑誌名 比較文化研究	６．最初と最後の頁 77-88
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 Nakamura, Yuki	４．巻 72
２．論文標題 The Renaissance Paradigm of Humanity in The Tempest and its Modern Interpretation by Alien: Covenant	５．発行年 2022年
３．雑誌名 自然・人間・社会	６．最初と最後の頁 1-12
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 Yuki Nakamura	４．巻 282
２．論文標題 Horror of Dehumanization: The Ethical and Aesthetic Boundary in Early Modern English Revenge Tragedy	５．発行年 2021年
３．雑誌名 経済系:関東学院大学経済経営学会研究論集	６．最初と最後の頁 160, 169
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 Yuki Nakamura	４．巻 1
２．論文標題 Renaissance Dramatic Convention of Representing Violence and Its Modern Continuation: Titus Andronicus and Death Wish	５．発行年 2021年
３．雑誌名 “I Have a Dream”: From a Culture of Violence to a Culture of Nonviolence	６．最初と最後の頁 21, 37
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 Nakamura, Yuki	4．巻 67
2．論文標題 The Modern Image of Justice: Senecan Tragedies as a Medium of Renaissance Humanism.	5．発行年 2019年
3．雑誌名 自然・人間・社会	6．最初と最後の頁 33-46
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 Nakamura, Yuki	4．巻 68
2．論文標題 Utopia and the Monster: Ridley Scott’s Alien: Covenant as an Adaptation of The Tempest.	5．発行年 2020年
3．雑誌名 自然・人間・社会	6．最初と最後の頁 1-13
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 中村友紀	4．巻 1
2．論文標題 小人とは誰か：『借りぐらしのアリエッティ』の少女の通過儀礼	5．発行年 2018年
3．雑誌名 宮崎駿が描いた少女たち	6．最初と最後の頁 154-175
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計10件（うち招待講演　0件／うち国際学会　9件）

1．発表者名 中村友紀
2．発表標題 シェイクスピアの翻案映画分析のための枠組みの検証
3．学会等名 日本比較文化学会3支部合同大会
4．発表年 2023年

１．発表者名 Nakamura, Yuki
２．発表標題 Translating Thick Description: Throne of Blood, its Subtitles in Two Versions, and Macbeth
３．学会等名 Shakespeare, Austin and Audiovisual Translation（国際学会）
４．発表年 2022年

１．発表者名 Nakamura, Yuki
２．発表標題 The Renaissance Paradigm of Humanity in The Tempest and its Modern Interpretation by Alien: Covenant
３．学会等名 The European Society for the Study of English（国際学会）
４．発表年 2021年

１．発表者名 Nakamura, Yuki
２．発表標題 The Furies and Justice in Ancient, Early Modern, and Modern Revenge Drama
３．学会等名 International Conference on Myths, Archetypes and Symbols: “Models and Alternatives”（国際学会）
４．発表年 2021年

１．発表者名 Yuki Nakamura
２．発表標題 Renaissance Dramatic Convention of Representing Violence and Its Modern Continuation: Titus Andronicus and Death Wish
３．学会等名 Violence and Society（国際学会）
４．発表年 2021年

１．発表者名 Yuki Nakamura
２．発表標題 Modernity of the Scapegoat Ritual in Early Modern English Revenge Tragedy
３．学会等名 Play, Masks and Make-believe: Ritual Representations（国際学会）
４．発表年 2021年

１．発表者名 Nakamura, Yuki
２．発表標題 A Revenger Must Die: the Scapegoat for the Community in Revenge Tragedies.
３．学会等名 Shakespeare Theatre Conference（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 Nakamura, Yuki
２．発表標題 Utopia and the Monster: Ridley Scott’s Alien: Covenant as an Adaptation of The Tempest.
３．学会等名 Europeasn Shakespeare Research Association（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 Yuki Nakamura
２．発表標題 Revenge Drama as a Convention of Representing Anti-Values
３．学会等名 The European Society for the Study of English（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 Yuki Nakamura
２．発表標題 Vigilance over Monarchy in Early Modern English Revenge Tragedy
３．学会等名 Monarchy and Modernity（国際学会）
４．発表年 2019年

〔図書〕　計1件

１．著者名 中村友紀	４．発行年 2024年
２．出版社 春風社	５．総ページ数 308
３．書名 私たちはシェイクスピアの同時代人：映画にみる現代人のルネサンス的心性	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関